



TITLE:

睪丸類表皮嚢腫の1例

AUTHOR(S):

東條, 雅季; 村上, 光右; 宮内, 大成; 伊藤, 晴夫; 島崎, 淳

CITATION:

東條, 雅季 ...[et al]. 睪丸類表皮嚢腫の1例. 泌尿器科紀要 1985, 31(3): 517-520

ISSUE DATE:

1985-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/118427>

RIGHT:

辜丸類表皮嚢腫の1例

千葉大学医学部泌尿器科学教室（主任：島崎 淳教授）

東 條 雅 季
村 上 光 右
宮 内 大 成
伊 藤 晴 夫
島 崎 淳

A CASE OF EPIDERMOID CYST OF THE TESTIS

Masaki Tojo, Mitsusuke MURAKAMI,

Taisei MRYAUCHI, Haruo ITO and Jun SHIMAZAKI

From the Department of Urology, School of Medicine, Chiba University

(Director: Prof. J. Shimazaki)

A 32-year-old businessman was admitted with the chief complaint of a right testicular mass without pain. Laboratory findings including serum AFP, HCG, and β -HCG were within normal limits.

Right high orchiectomy was performed under the diagnosis of testicular tumor. The cyst was located at the middle of the testis and was $3.5 \times 3.0 \times 2.0$ cm in size. The cut surface of the tumor revealed a fibrous capsule with a keratin mass in it.

Histological diagnosis was a benign epidermoid cyst. This case seems to be the 56th case of epidermoid cyst of the testis reported in the Japanese literature.

Key words: Epidermoid cyst, Benign testicular tumor

緒 言

類表皮嚢腫は、全身の皮下、脳、卵巣などに比較的良く見られるが¹⁾、辜丸内の発生はまれである。最近、われわれは本腫瘍の1例を経験したので、文献的考察を加えてここに報告する。

症 例

患者：32歳 男性

主訴：右辜丸無痛性腫大

家族歴：特記すべきことなし

既応歴：2歳時より小児喘息。現在もときどき、発作あり。外傷の既応はない。

現病歴：1983年1月頃、右辜丸の無痛性腫大に気づき、8月に当科を受診した。発熱はない。

現症：胸腹部理学的所見は異常なし。そ径リンパ節

触知せず。左側辜丸、副辜丸、精索は異常なし。右陰嚢内は、副辜丸、精索は正常であるが、右辜丸は $4.5 \times 3.5 \times 3.0$ mm と大きく、弾性硬、透光性（-）、圧痛（-）であった。

入院時検査成績：

血液一般、血液化学、検尿、ともに異常なし。血沈、胸部X線も異常なしであった。AFP、HCG、 β -HCG は正常値であった。また、LH、FSH、テストステロン、プロラクチン、エストラジオールも正常範囲内であった。

手術所見：

以上より、右辜丸腫瘍と診断、右高位除辜術を施行した。腫瘍は、辜丸中央部実質内に存在し、 $3.5 \times 3 \times 2$ cm の球状、境界鮮明な嚢腫状病変で、辜丸実質とは被膜により境界されており、その内腔には黄白色の乾酪様物質が充満していた。



Fig. 1. 摘出標本

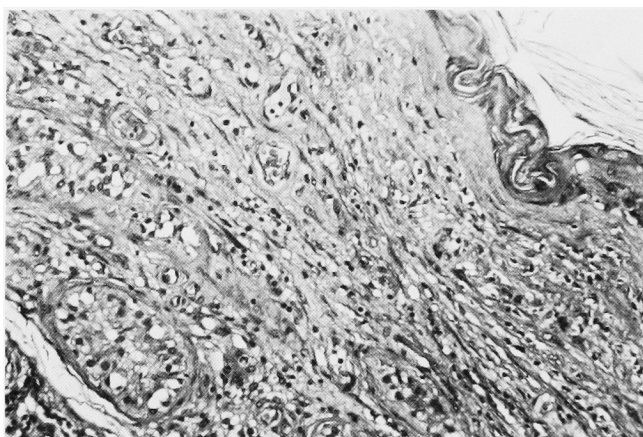


Fig. 2. 組織所見

右上は層状のケラチン様物質で、壁は角化扁平上皮 (H.E. 染色)

組織学的所見：

嚢腫壁内面は角化扁平上皮により被われ、内腔にはケラチンマスを認めた。被覆上皮の一部は剝離を示していた。実質および嚢腫壁には、ほかの皮膚付属器、骨などの形成は認められなかった。嚢腫周囲の睾丸組織は圧排され、一部の精細管が硝子化を示していた。悪性所見は認められず、睾丸類表皮嚢腫と診断された。本患者の術後経過は良好で、術後3カ月を経過した現在、再発は認められず健在である。

考 察

睾丸腫瘍はほとんどが悪性腫瘍であり、良性腫瘍は全睾丸腫瘍の2～4%²⁾にしか過ぎない。良性腫瘍のなかでは類表皮嚢腫がもっとも多く、約50%^{3,4)}を占めるといふ。ほかの良性腫瘍としては、類表皮嚢腫、間細胞腫、血管腫、神経線維腫、線維腫などが存在する

が⁵⁾、類表皮嚢腫は類表皮嚢腫のつぎに多く、全睾丸腫瘍の約1%と報告されている⁶⁾。Price と Mostofi によれば、American Testicular Tumor Registry により集計された、瘢痕をとみなわず、ほかの要素も存在しなかった70例は、いずれも転移を示さなかったという⁶⁾。本邦の報告例においても、転移を認めたものは1例もない。また、Abel と Holtz は、彼らが集計した10例すべてにおいて、睾丸類表皮嚢腫は子供のときから発生が認められる、と述べている⁶⁾。睾丸類表皮嚢腫は、思春期前に発達して、一定段階にいたると、腫瘍の成長が止まるという⁶⁾。

睾丸類表皮嚢腫は、われわれが調べた限りでは、本邦で55例の報告を見る。これに自験1例を加えた56例について検討を加えた。

年齢構成では、全年齢層に発生が認められるが、とくに15～29歳の若い年代に多い。ただし、前述のよう

Table 1. 睪丸類表皮嚢腫の年齢分布

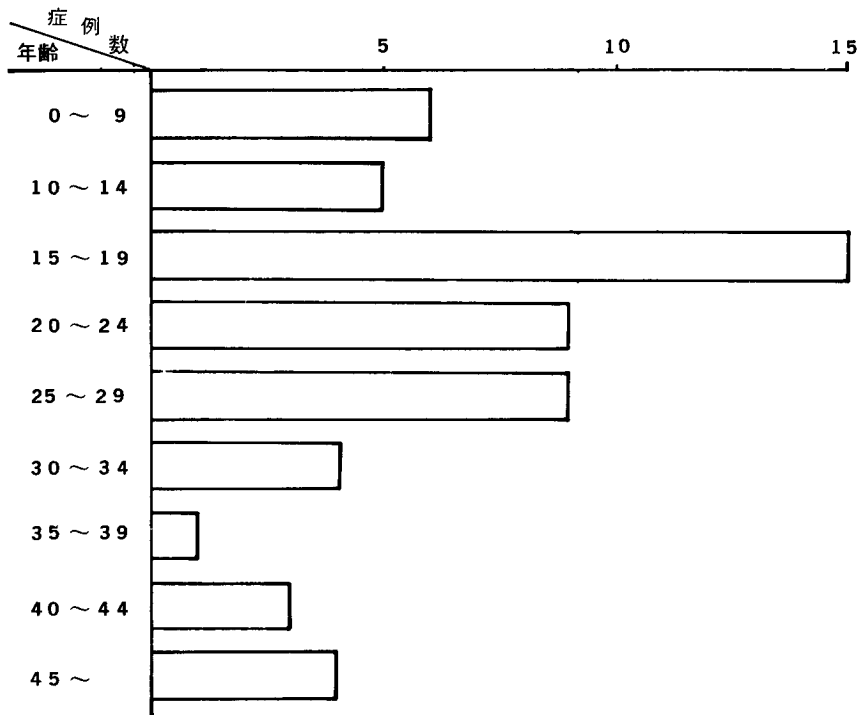


Table 2. 睪丸類表皮嚢腫の発生部位

右	27
左	29
記載なし	0
計	56

上部	10
中央部	19
下部	18
上部及び中央部	1
中央部及び下部	1
大半を占めるもの	1
記載なし	6
計	56

Table 3. 睪丸類表皮嚢腫の術前診断

睪丸腫瘍	30
副睪丸結核	14
副睪丸炎	2
副睪丸腫痛	1
成熟奇形腫	1
類表皮嚢腫	2
記載のないもの	6
計	56

に、本症は思春期前にすでに発生し、徐々に大きくなるという過程を取ると考えられることから、Table 1 については、患者が腫瘍に気がついた年齢、というように解釈した方が良いであろう。

発生部位の左右差は認められないが、睪丸上部よりも、中央部、下部に比較的多く発生している。

腫瘤の大きさは、文献により記載の方法がまちまちであるが、2~3 cm のものが多く、自験例はやや大

きい部類に属する。

術前診断は、睪丸腫瘍と診断されたものが過半数を占め、副睪丸結核がそれにつぐ。術前診断のむずかしさがうかがわれる。

術式は、本邦56例中43例で除睪術がおこなわれている。これは、術前に睪丸腫瘍と診断されることが多いことを考えれば、納得できる結果であろう。嚢腫摘出術をおこなった12例について、良性と判断した根拠の内訳は以下のごとくである。

1) 腫瘤が周囲と判然と境界されているためとした

Table 4. 睪丸類表皮嚢腫の術式

除 睪 術	4 3
単 純 除 睪 術	5
高 位 除 睪 術	1 6
単 純 高 位 別 不 明	2 2
嚢 腫 摘 出 術	1 2
計	5 5 (剖 検 1)

症例……5例.

2) 迅速病理診断で類表皮嚢腫, または良性腫瘍と確認された症例……2例.

3) 試験切除として, 嚢腫摘出術をおこなった症例……1例.

4) 不明……3例.

しかし, 最近では, 嚢腫摘出術はおこなわれる傾向にはない.

睪丸類表皮嚢腫は良性腫瘍であるから, 治療方法としては, 嚢腫摘出術のみで十分であり, 容易に除睪術をおこなうべきではない, とも考えられる^{4,7-12)}. しかし, 睪丸腫瘍では, 良性腫瘍の占める割合は2~4%とまれであること, 術前に良性腫瘍と診断することは困難であること, また術中迅速凍結切片検査をおこなうことも腫瘍播種の危険があることなどから, まず高位除睪術をおこない, 摘出標本の病理学的検索をおこない, 術後療法を決定することが良い, ということになろう^{2,3,7,13-18)}.

結 語

1) 右陰嚢内の無痛性腫脹を主訴とした, 32歳男子に対し, 高位除睪術を施行し, 病理組織所見から睪丸類表皮嚢腫の診断を得た.

2) 本症例は本邦56例目にあたる, と思われる.

文 献

- Samuel A and Tweeddale DN: Epidermoid cysts of the testis. J Urol **85**: 311, 1961
- Nagel LR and Polley VB: Epideroid cysts of the testis. J Urol **73**: 124, 1955
- Kihl B and Magnusson PH: Epidermoid cyst of the testis. Scand J Urol Nephrol **11**: 73~75, 1977
- Miller EV: Benign testis tumor: Epidermoid testicular cyst. J Natl Med Assoc **64**: 48~49, 1975
- Gage AA and Brodie EL: Epidermoid cysts of the testis. J Urol **63**: 539, 1950
- Tumors of the male genital system, Atlas of tumor pathology. Firminger, Harlan I, 2nd series, fascicle 8, 66, Armed forces institute of pathology, Washington, D. C. 1973
- 中村昌平・横山正夫・阿曾佳郎: 睪丸類表皮嚢腫の1例と本邦症例の文献的考察. 臨泌 **30**: 975~978, 1976
- 嶋津良一・鄭 漢彬・坂 義人: 睪丸類表皮嚢腫の2例. 臨泌 **31**: 637~640, 1977
- Gonzalez BL and Ross LS: Epidermoid cysts of testis; Rationale for conservative management. Urol **9**: 456~458, 1977
- 大矢正己: 睪丸類表皮嚢腫の1例. 臨泌 **30**: 443~445, 1976
- 小川秋実・横山正夫・仁藤 博: 睪丸類表皮嚢腫の2例. 臨泌 **23**: 845~849, 1969
- Cook MFE and Kimbrough CJC: Epidermoid cysts of the testicle. J Urol **72**: 236~238, 1954
- 千葉栄一: 睪丸類表皮嚢腫の1例. 日泌尿会誌 **70**: 362, 1979
- 江本侃一・小嶺信一郎: 小児睪丸腫瘍の2例. 西日泌尿 **41**: 1233~1234, 1979
- Halley JBW: Epidermoid cyst of testis: Report of five cases and review of the literature. J Urol **91**: 380~386, 1964
- Weitzner S: Epidermoid cyst of testis: Report of five cases and review of the literature. J Urol **91**: 380~386, 1964
- 平石功治・堀内誠三・親松常男: 睪丸類表皮嚢腫の2例. 臨泌 **26**: 505~508, 1972
- Price EB Jr: Epidermoid cysts of the testis; A clinical and pathologic analysis of 69 cases from the testicular tumor registry. J Urol **102**: 708~713, 1969

(1984年7月30日受付)